

為替リスクが高まる中での投資法は？



シニア・ストラテジスト 石黒英之

ポイント① 投資家の間で意識される為替リスク

8月からのわずか1ヵ月強の間で、円が米ドルに対して一時13円超下落するなど、円安米ドル高が急速に進行しており（右上図）、米ドル建て資産への投資に消極的になる投資家も多いとみられます。その一方、S&P500種株価指数は、FRB（米連邦準備制度理事会）によるインフレ抑制に向けた急ピッチな金融引き締めに対する不透明感を背景に、年初から16.5%下落しており、米国株には値ごろ感が高まりつつあるともいえます（同図）。

急ピッチな円安米ドル高が進んでいることで、米ドル建て資産投資を行なう際に重要となる「為替リスク」への不安が投資家の間で広がりつつあるなか、どのように投資していくのがよいのでしょうか。

ポイント② 為替リスクが高まる中での投資法は？

結論からいうと、一定額を投資し続ける「ドルコスト平均法投資」が有効といえそうです。米ドル円が月次ベースで高値（144.66円）を付けた1998年7月末（右上図）に、S&P500種株価指数（円ベース）へ一括投資した場合と、ドルコスト平均法投資を行なった場合をシミュレーション（20年間）すると、前者と後者とでは多くの場面でパフォーマンスに差が出ていることがわかります（右下図）。

一括投資の場合はその後の為替や株式相場の影響を大きく受けますが、ドルコスト平均法投資の場合は、円高米ドル安や株安が進み円ベースの価格が安くなった時にも一定額で買い付けを行なっているため、取得コストが下がり、その後のリターンが大きく変わります。為替リスクが気になる投資家は「一括投資」ではなく、「ドルコスト平均法投資」で同リスクを分散しつつ、長期的な目線で投資を行なうことが重要といえるのではないのでしょうか。

米ドル円とS&P500種株価指数



期間：1998年7月末～2022年9月7日、月次
（出所）Bloombergより野村アセットマネジメント作成

S&P500種株価指数（円ベース）と
同ドルコスト平均法投資の動き（20年間）



期間：1998年7月末～2018年7月末、月次
・ドルコスト平均法投資は上記期間の毎月末に一定額を投資し続けた場合の時価評価額
上記は過去の市場指数を基に野村アセットマネジメントが算出したシミュレーション結果であり、
将来の投資成果を示唆あるいは保証するものではありません。
算出過程で取引コスト等は考慮していません。市場指数そのものに投資することはできません。
（出所）Bloombergより野村アセットマネジメント作成

*当資料は、一部個人の見解を含み、会社としての統一見解ではないものもあります。

当資料は、投資環境に関する参考情報の提供を目的として野村アセットマネジメントが作成したご参考資料です。投資勧誘を目的とした資料ではありません。当資料は市場全般の推奨や証券市場等の動向の上昇または下落を示唆するものではありません。当資料は信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。当資料に示された意見等は、当資料作成日現在の当社の見解であり、事前の連絡なしに変更される事があります。なお、当資料中のいかなる内容も将来の投資収益を示唆ないし保証するものではありません。投資に関する決定は、お客様ご自身でご判断なさるようお願いいたします。投資信託のお申込みにあたっては、販売会社よりお渡します投資信託説明書（交付目論見書）の内容を必ずご確認ください。